様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　25 日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研空（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520667
研究課題名（和文）　『一遍聖絵』にみる中世都市成立期社会の遺跡情報学的研究

研究課題名（英文）　That focus on "IPPENN HIJIRIE", Studies of History and Archaeology of medieval city in Japan

研究代表者
鋤柄 俊夫　(SUKIGARA TOSHIO)
同志社大学・文化情報部・教授
研究者番号：40319471

研究成果の概要（和文）：
（１）『一遍聖絵』を歴史資料とした新しい研究の方法と解釈を示した。（２）鎌倉時代の善光寺門前の景観と構造について、絵巻と遺跡と地理情報と胎土分析から、鎌倉との密接な関係の実態を明らかにした。（３）港湾都市が、臨海部と内陸部の二元構造であることを明らかにした。（４）これまで不明な点の多かった鎌倉時代の都市のモデルを初めて示すことができた。

研究成果の概要（英文）：
（１）We have developed a new method of historical study of "IPPEN HIJIRI E".（２）By scientific analysis of the pottery and painting materials and ruins and geographic information, that describes the structure of the surrounding landscape and Zenkoji of the Kamakura period.（３）Explained ,that the port city is a binary structure of the coastal and inland.（４）Described for the first time a model of the city of Kamakura Period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、考古学
キーワード：一遍聖絵、中世都市、中世都市遺跡、地理情報、空間構造

１．研究開始当初の背景

網野善彦氏と石井進氏が提起した日本中世社会の見直しの中で、その中心におかれたのが都市の研究だった。なかでも 1993 年に始まった中世都市研究会の活動は、これまで個別分散的に扱われていた市や町などの諸要素を、「都市」というキーワードで遺跡と文献の両面から見直すことで、日本列島の各地で活躍していた様々な職種の人々の姿と、そこから再現される社会の仕組みについて、その重要性を中世史全体に意識させるという大きな業績をあげた。また「都市」というキーワードで、場所を基盤として遺跡と文献の連携研究を推し進めることで、総合研究としての歴史学を切り拓いた点でも重要な意義がある。

しかしその研究会も 10 年をこえ、これまでの研究に対する総括とそれをふまえた新たな展開への模索が必要な段階に来ている。そのひとつは「中世都市」に対する情報が集

積される中で一定の類型化が進んだ結果、分類の「あてはめ」が優先された解釈もおこなわれる傾向が強くなってきた点であり、もうひとつは、これまで取り上げられた遺跡の多くの年代が室町時代であり、中世都市成立期が、あまり検討されなかった点である。それではどうしたらいいのか。

解決の糸口は、石井進氏が示した「中世都市」の定義にある。「中世都市」とは、農村とは異なる多様な価値観をもった人々が関わることで存在した空間なのである。従ってその分析の方法は、対象の分割や分類なのではなく、対象と関わった多様な要素との相対的な力学関係を重視すべきだったのである。

都市遺跡の研究には、遺物研究の方法を応用した分割と分類ではなく、地理情報（歴史地理）的な視点による情報の集積と、臨場感溢れる景観復原、そしてその遺跡と関係をもった周辺地域とのマクロ的な検討が必要なのである。

２．研究の目的

その点で現在最も重要な課題が、「中世都市」成立期の研究である。しかるに鎌倉に代表される特定の拠点を除き、その時代の「都市的」な場を遺跡から求めることは難しい。ところが、文献史料や絵画資料には、その時期の町や地域の拠点となった集落はいくつも記されており、その中で景観の視点を含めて最も注目されるのが『一遍聖絵』である。

時宗の開祖として有名な一遍は、延応元年（1239）に伊予で生まれた。河野氏の出身である彼は、幼い頃より出家して筑前と肥前で浄土宗を学び、父の死で故郷へ帰り一旦還俗するが、再び出家して信濃善光寺への参詣や伊予窪寺での修行の後、熊野で熊野権現の神託を受け、各地の人々に念仏を勧進するために文永 11 年（1274）旅に出た。これが有名な一遍の遊行の始まりである。

この 16 年間にわたる一遍の偉大な遊行の軌跡を記した『一遍聖絵』は、正安元年（1299）８月 23 日に聖戒が詞書を作り、円伊が絵を描き、三品世尊寺経尹が外題を記したとされる。その内容は、一遍が 13 歳に生家を出て修行に旅立つ場面から入滅までの様子を描いたものであるが、同時に一遍が訪れた日本列島各地の風景を、そこで生きていた人々の姿と共に写実的に描いている点で、中世史研究からも注目され、なかでも網野善彦氏は、彼の歩いた場所が中世初期を代表する全国各地の拠点都市であり、とくに彼はそこで新興の都市民を対象に教化したと指摘している。それゆえ、これまで誰もアプローチできなかった中世前期の都市の姿は、これらの地域拠点のひとつひとつを説明することで明らかにできることになる。

そこで本研究の目的であるが、これまでの中世都市研究で具体的に検討されることの少なかった鎌倉時代の都市と日本列島について、遺跡をベースにしながらも、遺跡以外に残されている豊富な史・資料を見直し、その中で最も注目される『一遍聖絵』をテキストにして、そこに登場する地域拠点とその周辺のあらゆる歴史情報（考古学・文献・地名・史跡など）を収集し、それらを分解・分類するのではなく、地理情報（歴史地理）的な視点で、それぞれの地域拠点とその周辺との関わりも含めた実態的な景観復原をおこない、中世前期における都市成立のメカニズムを説明するところにある。

３．研究の方法

本研究は、このような問題意識により、３年間におよぶ実地調査と議論をふまえ、その成果を 2011 年に公開シンポジウムで発表すべく調査と研究をすすめてきた。その過程と成果は次のとおりである。

一遍の諸国遍歴は、北が江刺、南が大隅におよぶが、本研究では、これらの地域を巡り現地調査と歴史地理的な情報の収集をおこない、それらを整理する過程でおこなってきた議論から、それぞれの地域拠点がもっている諸属性を、遺跡に基づいた地理情報学の観点で抽出し、その分析から中世前期の地域拠点の特質を明らかにすることとした。

（１）『一遍聖絵』に描かれた都市の調査

調査地は、岩手県平泉、福島県白河、栃木県小野寺、長野県善光寺、東京都石浜、神奈川県藤沢、静岡県三島社、愛媛県松山、香川県善通寺、岡山県福岡、岡山県西大寺、広島県新市、広島県厳島、福岡県大宰府、鹿児島県大隅正八幡などであるが、これに加えて平泉から鎌倉への変遷を示す平安末期の館遺跡として注目されている会津坂下町の陣が峯城、善光寺門前遺跡群と鎌倉遺跡群についても実地踏査と調査をおこなった。また、一遍が踊り念仏を開始した重要なポイントである信濃国伴野荘から信州の鎌倉と呼ばれる塩田平一帯の踏査もおこなった。

（２）文献史料にみられる都市の調査

鎌倉時代には聖絵が描かれた都市以外にも国府・守護所など多くの地域拠点があった。本研究ではそれに加えて、文献と遺跡から現地比定をおこない、史資料に登場する宿などの特質を探る調査も行った。

調査地は、新発見の阿波川西遺跡（徳島市）をはじめとして、府中に代表される武蔵国の鎌倉街道上の宿、伊豆韮山の北条氏館跡およびその周辺（伊豆の国市）、遠江見付と元島遺跡（磐田市）、石見益田の沖手遺跡とその周辺（益田市）、肥後二本木遺跡（熊本市）、薩摩中郡遺跡（出水市）を踏査し、遺跡とあわせて遺物の検討もおこなった。また、中世前期都市の源流にあたる古代都城について

も、平泉を遡り、胆沢城、志波城を踏査した。

（３）公開報告会シンポジウムについて

以上のような調査と研究を経た後、最終年度は中世都市成立期社会の特質について考察をすすめ、その成果を、帝京大学山梨文化財研究所と共催で、７月２・３日に公開シンポジウム「聖絵を歩く 景観を読む」（第９回考古学と中世史シンポジウム）を開催した。シンポジウムは、鋤柄が主旨説明をおこなった後、遊行寺宝物館の遠山元浩氏が「一遍聖絵を読み解く」として仏教美術史の視点から、五味文彦氏が「『一遍聖絵』と中世社会」として文献史研究から『一遍聖絵』の特徴とその時代について基調報告をおこなった。これに次いで第１部として太宰府市の山村信栄氏と長野市の宿野隆史氏と霧島市の重久淳一氏が、『一遍聖絵』に描かれた筑前と善光寺と大隅正八幡の風景について遺跡調査の成果をふまえた報告をおこない、第２部として磐田市の木村弘之氏と府中市の深澤靖幸氏と東京大学の榎原雅治氏が鎌倉時代の港湾都市と道と宿についての報告をし、最後に、高橋慎一朗氏が「一遍にとっての鎌倉」を問題提起とした討論をおこなった。

４．研究の成果

（１）『一遍聖絵』の景観復原的分析

鎌倉時代の列島社会を描き出した『一遍聖絵』には３つの大きな要素がある。第１点は言うまでもなく一遍の生涯そのものであり、第２点は描かれた風景が持つ意味であり、第３点は描かれた場所が持つ意味である。これまでの研究ではこれらが個別に検討されてきたが、本研究の最初の成果は、この３つの要素を総合した歴史研究としての新しい絵解きである。

たとえば京都についてみれば、『一遍聖絵』の中で京都を描いている場面は３カ所ある。最初の場面は弘安２年（1279）の春頃、立ち寄った烏丸高辻の因幡堂で、次の場面は、東国を巡った後、京に入った弘安７年（1284）の閏４月 16 日の四条京極の釈迦堂で、３番目は空也上人の遺跡市屋を訪れて 48 日間におよぶ踊り念仏をおこなう場面である。

このようにみてくると、一遍が訪れた場所は「四条大路周辺」と「四条以南の鴨東」および「七条堀川」という３つの地区だったことになるが、この３つの地区とはどのような場所で、共通する特徴は何だったのだろうか。

一遍が２度訪れた因幡堂は、度々の火災に遭いながらも、多くの信者に支えられて短期間で復興されてきたことが『中右記』などからわかり、その後に訪れた三条悲田院や雲居寺および六波羅蜜寺も、多くの家が建ち並ぶ賑やかな場所だったことがわかっている。

したがって、京都の中で一遍が訪れた場所は、空也の記憶に加え、庶民信仰を背景に人々が多く集まった空間だったということになる。ただし一遍が訪れなかった上京にも同様な場所があり、一遍が訪れた地区には、それとは別の特徴もあったことになる。そこでそれを明らかにするために、現在の四条通を中心に、発掘調査された 25 カ所について、鎌倉時代の情報を整理した結果、そこに大きな特徴のあることがわかった。

それを象徴するのが高級中国陶磁器の出土である。烏丸綾小路南東では井戸から青白磁の梅瓶や褐釉四耳壺などが出土し、蛸薬師油小路南東でも、一般の青磁や白磁の碗以外に白磁四耳壺、褐釉壺、黄釉盤などが出土している。こういった状況は京都駅前の調査地点でもみられ、それは、平氏の西八条邸と八条女院御所の中間に位置し、多くの金融業者が盛んに経済活動をおこなっていたためと考えられている。

四条大路周辺についても、『明月記』寛喜３年（1221）正月 15 日の記事などから「商賈の輩」が集住していたことが推定され、四条通を中心とした地区もまた、京都駅前と同様に盛んな商業活動がおこなわれていた地区とみて良いことになる。したがって、一遍が訪れた場所とは、貴賤を問わず集う信仰の拠点であり、さらに四条大路周辺については、七条町と同様に盛んな商業活動の場でもあったことになる。ただし一遍が訪れた京都の特徴はそれだけではなかった。

鎌倉時代の四条以南と鴨東地区の邸宅についてまとめた木内正宏氏は、在京幕府勢力の京屋敷が「六条大路周辺」と「東洞院～東京極と三条～五条の大路に囲まれた地区」および「六波羅」にみられ、その中でもとくに東洞院以東の四条大路周辺に武士の邸宅が集中しているとしている。『吾妻鏡』によれば、建久元年（1190）の上洛に対し、頼朝は宿所の候補地として「東路之辺」の「広らか」な場所を求め、その隣接地に「家人共の屋形」を構えたいとした。公武間の交渉を経る中で、最終的に宿所は六波羅の平頼盛旧跡に決まったが、木内氏はそれに加えて、東洞院以東の四条大路周辺が、承安２年（1172）の大火や、文治元年（1185）の大地震による復興が遅かった地区であったため、頼朝がその家人の屋形とあわせて求めた「広らか」な土地としての条件を満たしていたとして、この地区を新たに設けた幕府御家人の集住する一区画と推定したのである。

一遍が訪れた京都の場所とは、商業活動の盛んな庶民信仰の拠点であると同時に京内の武士の空間であり、『一遍聖絵』の分析は、それが鎌倉時代の都市京都の特徴であることを示したと言える。

また鎌倉についてみれば、『一遍聖絵』のなかの印象深い場面の一つに、幕府の本拠地鎌倉に入ろうとする一遍の一行と、それを阻

止しようとする武士の一団が対峙する巻五の場面がある。この絵の風景は、小袋坂を越えて、鎌倉の町中へ入ってきた場所、つまり鶴岡八幡宮の西の脇へ出てきたあたりの風景かと思われる。ところが、そうなると当然描かれるべき鶴岡八幡宮が描かれていないことが気になる。『一遍聖絵』の鎌倉入りの場面になぜ鶴岡八幡宮が描かれなかったのか、その理由を探ってみたい。

鶴岡八幡宮は、都市鎌倉の中央部の奥、小高い山の中腹に位置する神社である。もとは源頼義が石清水八幡宮を勧請したものであるが、源頼朝が現在の位置に移し徐々に整備されていった。鎌倉幕府や御家人の精神的中心であるとともに、中世を通じて鎌倉・東国の守護神として広く信仰を集めていた。よって、中世の鎌倉を象徴する場所の一つであったと言える。

武士たちに鎌倉入りを阻止された一遍の一行であったが、郊外の片瀬での鎌倉の人々に対する布教そのものは大成功であった。鎌倉の人々への布教が成功したのにもかかわらず、なぜ『一遍聖絵』は鎌倉の象徴とも言える鶴岡八幡宮を描かなかったのか。

一遍にとっての鎌倉は、公権力との関係を結ぶことに失敗した苦い経験の場所であるとともに、踊り念仏などを通じて都市の一般大衆への大々的な布教をおこなう転機となった場所でもあった。鎌倉の中心を象徴する鶴岡八幡宮は、一遍とは縁がなかった幕府や都市鎌倉の中心部を否応なく思い起こさせる存在であり、実景描写としては当然描かれるべきところを、わざと省いて片瀬の成功へと視点を移させようとしたのである。「描かれない」鶴岡八幡宮は、一遍の苦い経験を暗示するものであり、「描かれたもの」と「描かれないもの」の両者を視野に入れて『一遍聖絵』の光景を読み解いていくことが重要である。

このように、地理情報を基盤に遺跡と文献を融合させることで、絵巻に歴史資料としての新しい価値と解釈を付与することができるのである。

（２）善光寺門前遺跡について

善光寺門前の発掘調査で、鎌倉時代の薬研堀と、中国製青磁碗・土師器皿および国産陶器などが見つかった。このうち中国製青磁碗はいずれも龍泉窯系の鎬蓮弁文碗で、いわゆる劃花文碗は見あたらず、白磁碗も見られない。一方土師器皿は、ロクロ成形以外に手捏ね成形の皿が見られ、とくに手捏ね成形の皿は、おおむね 13 世紀の京都または鎌倉でみられるものと類似した形態を持つ。

平安時代終わりから鎌倉時代初めに築かれた薬研堀については特定の館に伴う施設だと考えている。今回善光寺門前で見つかった溝も、時期が下るが、中国陶磁器を出土し、京都または鎌倉に似た土師器皿を出土しているという点で、同様な見方ができる。

今回の調査に関係して注目されるのが、『明月記』に登場する「後庁」である。善光寺近辺には政務を司る諸施設（後庁）が置かれており、さらにそれは国衙機構の一部ではなく、鎌倉幕府が対善光寺政策のために設けた現地の重要拠点だったと考えられている。先に指摘したように、平安時代終わりから鎌倉時代の薬研堀には特別な意味が込められていた可能性があるため、今回見つかった 13 世紀代の薬研堀は、この『明月記』に描かれた善光寺近辺の風景の一部の可能性が考えられる。また今回の調査で注目されるもうひとつの点は、手捏ねの土師器皿をはじめとする多彩な中世陶磁器の存在である。なかでも中国磁器は青磁を中心に鎌倉と類似する構成を示している。さらに日本海側の陶器を代表する珠洲系陶器と、太平洋側の陶器を代表する常滑系陶器が同時に出土しており、鎌倉時代において、京や鎌倉に匹敵する盛んな広域流通がおこなわれていたことも明らかとなった。本研究では、このような広域流通をおこなった主体者を解明するために、長野市埋蔵文化財センターの協力により、土師器皿の胎土分析をおこない、その結果として京都産の土師器皿と異なる特徴が示された。これは手捏ね土師器皿が鎌倉からもたらされた可能性を示すものであり、広域流通の主体を明らかにする手がかりと言える。

（３）港湾都市と内陸都市

中世都市を代表する景観のひとつが港湾都市であることは言うまでもない。けれどもひとくちに港湾都市と言っても、そのバックグラウンドと地域性および機能には、さまざまな形があり、それらを総合的に峻別することが、この時期の都市遺跡を考える上で非常に重要な点となる。

たとえば出水市の中郡遺跡は島津の伝承を持つ館遺跡で、景徳鎮製の青白磁龍首水注が出土した 13 世紀の遺跡だが、最も注目されるのは地形の特徴である。八代湾の水面に向かった遺跡の丘陵は、現在その東西を水田に囲まれているが、かつてはそこに海が入っていたと思わせる景観であり、北から西を流れる岩下川の対岸には、木牟礼城があるため、現在は内陸になっているが、本来は中郡遺跡が有明海の海上交通を意識した都市だったと推定できることになる。景徳鎮製の青白磁龍首水注が見つかった意味はここにある。

益田市の沖手遺跡は、旧益田川に近い右岸の専福寺の地名が残る地区に所在する。調査により一帯に溝で区画された家並みが広がっていたことがわかった。その益田川を渡り、海へ向かった先にあるのが福王寺である。境内には、西大寺流の影響を示す十三重石塔や巨大な五輪塔の一部が建つ。そしてこの境内

の隣接地が中須西原遺跡である。15 世紀代を中心とする集落遺跡で、沖手遺跡が専福寺を中心とする鎌倉時代の港湾集落だとすれば、中須西原遺跡は福王寺に隣接する室町時代の港湾集落となる。中世の益田川河口は中須の南を巻いて西の高津川河口に向かっていたが、沖手の集落も中須西原の集落も、河口をさかのぼった停泊地に適した場所となる。さらにその経営主体をみれば、鎌倉時代は北条氏につながる人々と寺院、室町時代は益田館を拠点とした益田氏になるだろう。

徳島市の川西遺跡からは、鎌倉時代から室町時代始め頃までの大規模な護岸施設と、土師器皿の大量廃棄など一般の生活とは違った性格の遺物が見つかった。川西遺跡の西には国府地区があり、国府地区への表玄関は吉野川の支流である鮎喰川だが、徳島市街から川西遺跡にいたる途中は海抜が低く、かつては海が奥まで入っていたことも考えられるため、ここを経るルートも有力な交通路だったにちがいない。その景観は、現在の南さつま市（旧金峰町）と加世田市の境を流れる万之瀬川に関わる調査で発見された持躰松遺跡の風景と瓜二つと言っても過言ではない。

このような港湾都市と対比されるのが内陸都市である。このうち『一遍聖絵』に関係するものでは、伴野氏の館とも推定されている野沢城から伴野市庭にかけての一帯である。踏査の結果、上野藤岡から富岡街道を抜けて信濃に入り、やがて松本の府中に至るルート上に位置し、さらに千曲川の渡河点でもあったことが明らかとなり、街道と交差する川沿いに市と館が建つ鎌倉時代の風景が、西方寺と共に現在にも甦ってくることが確認された。また塩田平の象徴である塩田城も、これまで戦国期の城とされてきたが、現地を踏査した結果、山林寺院の構造を持っていることがわかり、本来は背後の象徴的な山塊を信仰の対象とした鎌倉時代の寺院が前身であり、塩田の集落は、その全面に展開することが推定できた。これらは鎌倉時代の内陸都市の景観を構造を示す貴重な事例である。

（４）中世前期都市の見方と日本社会

このようにして明らかにされた鎌倉時代の日本列島の姿をまとめると、大きく「ネットワーク」と「地域性」という２つのキーワードが見えてくる。

このうち前者についてみれば、平安時代末期の内乱を経て、各地に出現した拠点都市をつないだのが宗教者達だった。一遍はその代表であるが、網野善彦氏が指摘した神人や供御人に加える形で、「聖」の存在が今回とくにクローズアップされることになった。

なかでも善光寺は、会津にあたるような日本海文化と太平洋文化の結節点であり、日本海側の珠洲系陶器と太平洋側の瀬戸や常滑などの東海系陶器が共存する日本列島でも稀な地域拠点となっている。今回の研究で最初に注目される点がここで、その背後にいたと考えられてきたのが善光寺聖と呼ばれた人々であった。その実態については、様々な研究があるが、今回行なった善光寺門前遺跡出土土師器皿の胎土分析の結果は、京都と異なる可能性を示した。これらの土師器は、形だけをみれば京都系とみなされるものだが、物理的な特性では、鎌倉で作られた京都系の土器であった可能性が考えられることになる。今回の分析はまだ十分な検討を経ていないために、結論として提示することはできないが、現時点において、鎌倉時代の信濃に対する影響力および流通主体として京都より鎌倉の優位さを指摘しておきたい。

網野善彦氏により、西日本と北東日本海流通の担い手として、神人と供御人が指摘され、その具体的な姿を京都型の土師器皿と瓦器碗の分布が示していることが明らかにされている。しかしその一方で、東日本の内陸流通を支配した存在については不明なままでいた。本研究で注目した「聖」は、まさにその空白の存在にあたる可能性が高く、善光寺門前出土土師器皿の分析結果は、東日本の内陸流通の担い手となった「聖」としての武士の存在を傍証するものと考えている。

一方後者は、これまでの研究で指摘されなかった一遍が訪れた場所の景観についてのひとつの特徴についてである。

たとえば大隅正八幡の場面を頭に入れながら現地を訪れると、正八幡のある宮内が、東の国分と天降川で区切られた特殊な空間であることがわかる。天降川の東は政治空間であり、西は聖空間となり、天降川の近くには湊の推定される地名があると言う。ちなみに天降川は数キロで鹿児島湾につながるため、宮内に面する天降川岸は、徳島の川西遺跡のような、国府に近接した流通拠点としての役割を持っていたことになる。

筑前の武士の館に推定される大宰府観世音寺隣接地についても、そのすぐ南を流れているのが御笠川であり、太宰府市教育委員会の調査成果をふまえれば、御笠川の北側が政治空間で、南側が町屋空間と考えられ、ふたつの異なった空間を区切る表象となっている。またこの御笠川は博多浜承天寺や聖福寺の背後を流れて博多湾に注ぎ込んでいるため、やはりその岸は流通拠点としての役割を果たしていた。

善光寺門前については、あまり注目されることはなかったが、門前を出る道が川で遮られており、今回の研究により、それが裾花川の旧流路の八幡川であり、その流路沿いに在地領主居館へ続く道がのびていたことも明らかとなった。この場合も、川はその地域の中で場の役割を分ける象徴として存在していたと考えらえるだろう。

また藤沢についても同様で、川は言うまでもなく遊行寺の門前を流れ江ノ島の海にそそぐ境川となる。

前近代社会における水上交通の重要性についてはあらためて指摘するまでもなく、すでに『一遍聖絵』においても、「備前福岡市」にとっての「船の浮かぶ川」の重要性や、京都の場面が「鴨川」と「堀川」が出入口の象徴として描かれていることも、指摘されていることである。けれども今回の研究によって、『一遍聖絵』のそれ以外の場面や、あるいは川が描かれていない場面であっても、一遍の訪れた場所と川には深い関係があり、さらにそれは、地域拠点の空間構造を説明する上で重要な役割を果たしていた可能性が高いと考えられることになった。

『一遍聖絵』に登場する諸都市は、いずれもその一部に空間の構成を整える大きな要素としての川を持っていた。この川が意味するものについては、一義的には流通の役割であり、それが鎌倉時代の都市の大きな特徴であることは言うまでもない。ただし川と都市の関係はそれだけではなく、『一遍聖絵』に描かれた拠点都市を、描かれなかった川も含めて川との関係で読み解くと、①その川によって様々に区分される都市の姿が見え、また②区分された要素も都市によって異なっていたことがわかった。これは中世都市のもうひとつの特徴である「地域性」の解明につながっていく可能性がある。この視点と方法を展開させることにより、たとえば、現在は断片的な館跡の情報のみで全体像が不明な平清盛の福原についても、和田の存在に加え、湊川に対する必要な場の役割を考察することで、具体性の高い中世前期都市の姿を復原することが可能性になると考える。

これまでの『一遍聖絵』の読み解きは、宗教的なテーマに加えて、場面の個別的な解釈が代表的なものだった。これに対して本研究では、場面の解釈に加え、一遍が訪れた場所と、訪れながら描かれなかった場所の意味に注目して、日本における都市成立期社会の動態を検討した。その結果、一遍が訪れた場所の空間的な特徴やそれらに共通する特性およびネットワークの主体者について新しい知見を得ることができた。

網野氏が指摘するように、鎌倉時代は、それまでの京都を中心とする社会から、日本列島の各地に姿を現した独自の文化と地域性が、新しい日本のかたちを築き始めた大転換の時代であった。本研究により、室町時代に偏った類型的な研究方法は克服され、さらにこれまでアプローチされることの無かった「中世都市」成立期の社会についても新しいモデルを提示することができた。本研究の成果が、網野善彦氏と石井進氏が提起した「中世都市」研究の新しい段階を開き、総合学としての歴史研究の発展と、日本社会再生の原動力に資することを期待したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 鋤柄俊夫、歴史をデジタル化する意味、博物館研究、査読有、通巻 516 号、2011、pp. 5-9
② 鋤柄俊夫、洛中洛外図を掘る、歴博、査読無、№164、2011、pp. 15
③ 鋤柄俊夫、書評　飯村均著『中世奥羽のムラとマチ　考古学が描く列島史』、日本歴史、査読有、第 753 号、2011、pp. 102-104

〔学会発表〕（計５件）

① 鋤柄俊夫・高橋慎一朗、主旨説明・一遍にとっての京都・一遍にとっての鎌倉、考古学と中世史シンポジウム、2011 年７月２・３日、帝京大学山梨文化財研究所（山梨）
② 鋤柄俊夫、鹿背山城跡について（コメント）・討論、京都府埋蔵文化財研究会研究集会「地域史のなかの中世城郭」、2011 年８月 28 日、京丹後市峰山地域公民館（京都）
③ 鋤柄俊夫、都市の蔵と館の蔵、考古学と中世史シンポジウム、2010 年７月３日、帝京大学山梨文化財研究所（山梨）
④ 鋤柄俊夫、中世の港湾都市益田と三宅御土居、平成 21 年度　益田市歴史講座、2010 年１月 24 日、益田市
⑤ 鋤柄俊夫、善光寺とその門前の考古学的景観復元、日本民俗建築学会、2008 年 10 月 13 日、善光寺講堂

〔図書〕（計４件）

① 鋤柄俊夫, 他、高志書院、中世人のたからもの、2011、235
② 高橋慎一朗、新人物往来社、武士の掟、2012、199
③ 鋤柄俊夫、高橋慎一朗, 他、高志書院、善光寺の中世、2010、225
④ 鋤柄俊夫、昭和堂、中世都市遺跡の見方・歩き方、2010、288

６．研究組織

(1)研究代表者
鋤柄　俊夫（SUKIGARA TOSHIO）
同志社大学・文化情報学部・教授
研究者番号：40319741

(2)研究分担者
高橋慎一朗（TAKAHASI SHINNITIROU）
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：10242158